

教 仏 名 聞

第58号
(発行日)
2015年7月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始。
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

光 明 月 日 に 勝 過 し て

(和讃法話)

光 明 月 日 に 勝 過 し て

超 日 月 光 と な づ け たり

釈 迦 嘆 じ て な お つ き ぎ

無 等 等 を 帰 命 せ よ

(現代語訳) 阿弥陀如来の光明は、この世の日や月の光とは、とても比べものにならない、それで超日月光と名づけられた。釈迦如来が、弥陀のこの光明のお徳の勝れていることを、ほめてもほめてもお説き尽くせない(大経)、それほど他に比類のない阿弥陀如来をたのみたてまつれ。
(語句) 無等等(無等しく)等しく等しきもの無き、比類のない仏。

このご和讃も曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』の

「光明照耀するごとく日月に過ぎたり。ゆえに仏を超日月光と号けたまはす。釈迦仏歎じたまはすもなおお尽きず。ゆえにわれ無等等を稽首したてまつる。」
を和讃にされたものです。

私たちにあって、この世界

の中で、身近で最も有難い光は、何と言つても太陽(日)の光でありましょう。次に月の光でしょうか。現代は電気の光が多く使用されていますが、いつの時代も太陽の光はなくてはならぬものです。

太陽の光なくしては生き物は生きていくことができませんから、「お天道さま」として拝まれてきたのも不思議ではありません。世界各地に太陽を神として崇拝してきた信仰があるほどです。ですから時に日食が起こると人々は大きな不安に陥ったことでしょう。もし太陽がなくなれば、この地球はすぐに暗黒になり凍りついてしまうでしょうね。私たちが生きていることの基本条件に太陽の光の恵みがあるといえましょう。

しかし、太陽や月の光そして電気の光は、どこまでも物質の光です。私たちの生活にはなくてはならないものですが、このような物質の光は私の体

を照らしても、心の中まで照らすことはできません。ところで心は見えませんが、日常生活ではあまり注意しませんが、(心)は不思議ですね。

ところで物質の世界(物質現象)と心の世界(意識現象)とはどういう関係になつているのでしょうか。これも多くの思想家や科学者が考えてきました。分らないことだらけというのが実際ですね。では、仏教でそこをどう考

えているのでしょうか。仏教の思想のなかでもいろいろの説があるようです。現代、フランス人で深く仏教に帰依し学びを重ねてきたマチウ・リカール師は次ぎのように言っています。

「宇宙は意識と共存している

のです。物質の連続体と並んで意識の連続体があるということ。これはどういうことを言おうとされているのでしょうか。

まず、宇宙は広大な物質現象が満ち満ちていること、そしてそれが連続しているということ、この事は私たちにもわかります。人も動物も植物も地球もあるいは太陽も、それ以外の星々もあるいは空気も水もすべては悠久の昔から活動し続けている物質現象であるといえましょう。

しかし、(世界そのもの)は物質現象だけではありません。それについてナーガールジュナ(龍樹菩薩)は「人々は言う(空が見える)と。しかし、どうして空が見えるのか。考えてみるがいい」

《 盂 蘭 盆 会 法 要 》

八 月 十 日 (月)

午 後 二 時 始 まり

- * 法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。
- * 八月十二日と八月二十二日の集まりはありません。
- * 八月二日(座談会)・八月六日(聖典学習会)はあります。

と言っています。空なり月なり花が（見える）（認識している）。そのように（見たり）（認識している）ものは何か。天文台などで宇宙の星々を研究者が観測していますが、観測者が（観測している働き）はいったい何か。あるいは手があり足があり身体があるということを「感知しているもの」は何か。いわばあらゆる物質現象を物質の現象として（知る）のは何か。いわゆる「知る」働きはいったい何か。

それは物質なのでしょう。そうではなくて、それを（心）とか（意識）とか名づけているのでしょうか。

十九世紀フランスの作家であつたビクトル・ユーゴーが「海よりも広いものは空である。空よりも広いものは心である。」

と言つたそうです。この言葉を児玉暁洋師から私が始めて聞いたのはもう五十年近く前のことです。その時は、どうも納得できませんでした。海よりも空が広いことは分かります。しかし空よりも心が広いということは納得できませんでした。しかし、今は、この言葉が意味していることはうなずけます。

実際、この広大な宇宙にし

ろ、ミクロの領域にしる、それを「知る」心がなければ、まったくそれらには無いに等しいではありませんか。身体でも、もし心がなければ、身体を身体と認めることはできません。この肉体は（知られることによつて）はじめて（肉体）なのです。

そこで物質とは全く異質な（知る働き）、それが「心」でしょう。心の働きがあることは毎日の私たちの経験から疑うことはできません。しかもそういう心の働きの範囲はどこからどこまでという線引きはできませんから、無限定といえるのではないのでしょうか。

西田幾多郎博士は（西田幾太郎全集十。一八〇頁）

「我々の心は無限なる意識の流である。それは無限に現れ、無限に消え行く、形としては把握すべからざる世界である。」

と言っています。

それですから、リカール師は、意識は物質現象と別でありながら離れず、いわば共存している領域として、連続しつつあるというのです。宇宙が量りなく広いように、意識の領域も広大なのでしょうか。

さて、阿弥陀仏の光明は太

陽や電気のような物質の光ではなくて、心の光と言われています。しかも無量の光明と説かれています。

いま超日月光と呼ばれている仏の光はこうした心の光であり、阿弥陀仏の光です。阿弥陀仏の光明には、日月のような物質の光を超えた素晴らしいお徳があつて、釈尊もこのお徳を説き尽くすことができないほどだ、とここで讃えられています。

阿弥陀仏の光明を「超日月光」と讃えられる理由の一つは、人生生活では物質現象を価値づけているのは心だからです。

「お金が大事だ」と言っているのは、心です。「健康第一」と言っているのは体ではなくて心です。「長生きしたい」「死にたくない」と言っているのは、肉体ではなくて自分の心です。もし心がなければ、すなわち机や鉄板のような物質の固まりでしたら、それらを壊そうとするものが襲つてきても、一切問題にしません。悩みも不安もありません。

私たちは心があるから、貧乏を恐れ、病気になるか不安をもち、死ぬことを嫌がり、福樂を迎え入れ、健康を

喜び、長生きを求めるのでしよう。

日月や電気のは私の外を照してくれて、明るさや暖かさを恵んでくれます。ですからこれは大きな恵みです。ただし、心の中を照らすことはできません。私たちの心は暗く、しかも思いわずらいで一杯です。私たち凡夫の心は、心あるゆえに楽しみのある半面、苦しみや不安が大きいのです。

この心の領域を照らしたもうのが阿弥陀仏の光明です。超日月光である阿弥陀仏の光明に私たちの心は照らされているのです。

しかし、私たちは光明のほたらきをそのまま直接に知ることには難しいのです。仏様の光明であるとか、仏の光明に照らされているとか教えられますが、それを直接に感得することは凡夫には及びがたいといえましょう。

阿弥陀仏の光明は言葉となつて私たちにであつて下さるのです。この言葉のおかげで阿弥陀仏の光明にであうのです。その言葉が南無阿弥陀仏のみ言葉です。この仏の言葉に喚びかけられ、喚びさまされて、やっと私たちは阿弥陀

仏の大慈大悲のお心が知れるのです。「汝を助ける」「罪悪の深い汝を引き受ける」「浄土に生まれさせる」の仰せが南無阿弥陀仏の仰せです。この仰せ下さる大慈悲のお心によつて、私は自分が「煩惱具足の身」であることが知らされてきます。そして一番知らされることは、光でありいのちである阿弥陀仏が私とともにいて下さつていふこと、お粗末な私にもかかわらず受け入れて下さつていふことを知ります。この（お知らせ）が人生の智慧になつて下さいます。

この単純な智慧が人生の苦をやわらげ、何が真実であり、何がまことの価値である、何が支えであるかを知らせて下さるのです。

それを裏から言えば、この世の人それぞれの財産とか才能とか能力とか権力とか学歴とか人格性とか、そういう人々のもっているさまざまなきものは、それぞれに価値があります。すべて仮のものであります。そういう世の中のさまざま価値を高く見積もりすぎると、この世の価値に振り回され、権力に巻き込まれたりします。また人と人の違いを大きく見過ぎて、人

を差別し兼ねません。

阿弥陀仏の価値をここでは「無等等」といわれますが、それは阿弥陀仏に「等しく等しい」というような絶対的な価値は外にないの思し召しではないでしょうか。阿弥陀仏はこの世のさまざまな価値を超えた比べようのない尊い働きであり、価値であり、常住なるまことであることを知らせて下さる言葉だと伺うことができます。

南無阿弥陀仏という言葉が何を表し、私たちにとってどのような意味をもっているのか。そういうことは証りを開かれた仏陀釈尊が説き示されて始めて、世の中の人々に知られる事になりました。それが浄土の経典として伝わり、七高僧や親鸞聖人がそれらの経典の本当の意味を明らかにして伝達されました。そのおかげで私たちは経典に説かれたまことの言葉を「聴く」ことができます。

「聞く」と事なり「聴く」という字は、「ゆるされてきく」という意味だそうです。私たちが聴こうとすれば自由に聞きうるような当たり前の言葉ではなくて、仏さまの方から

語られてのみ、始めてそれをお聞かせいただけるのです。

仏陀の言葉は、日常生活にあふれている普通の言葉ではなく、仏陀がお説き下さらなければ、到底「聴く」ことができない、そういう有り難く聞き難い言葉です。それをご法縁をいただいてお聞かせいただき、ということが、「ゆるされてきく」という「聴く」でありましょう。

近年、仏事をおこなう人々が減っています。ご法事とか仏事は「意味がない」「何の得にもならない」「わずらわしい」などの理由でなされなくなってきたように思います。しかし、仏事というものは、亡き人を縁として、たとえば祥月命日を縁として、あるいは年回法要を縁として、仏陀のお言葉をお聞かせいただくというのが仏事の目的です。

仏の言葉は常識的な倫理とか社会生活に役立つというたぐいの話ではありません。いわゆるお互いの人間同士がかりあひしやべりあうような言葉ではありません。南無阿弥陀仏の言葉は、真実そのものが何であり、私たちにどうかかわって下さっているのか、真実そのものが私たちには大いなる恵みであること、そう

いう幸いなお言葉なのです。

この南無阿弥陀仏のいわれを詳しくお説き下さる場が寺なのです。

もちろんお寺では南無阿弥陀仏の意味を聞くことはできません、家庭でのお仏事の際には仏法の話詳しく聞くことはできないでしょう。簡単な法話しか聞く時間はないでしょう。しかし、仏事の時に、南無阿弥陀仏と称え、南無阿弥陀仏と聞く、という一事。その一言の中に、すでに真実は顕現しているのです。

難しいややこしい話ではないのです。南無阿弥陀仏の一句が私の人生に届く、そこに仏事の大事な意味があるので。ですから仏事の時はだまって後ろにすわって人ごとのように見ているのではなく、お互いに口にお念仏を申し、お念仏を聞かせていただくことが肝要です。真実は「南無阿弥陀仏」と喚びづめにし、私たちに「あなたとともにいる。あなたの罪は引き受けてくれる。助ける」と阿弥陀仏が喚びかけて下さっている、その声は南無阿弥陀仏の一言なのです。

そういう意味からも仏事が無くなっていくということは、仏の言葉にであう縁が乏しく

なり、もはや「人間の日常世間の言葉」しか聞いていない人生になりかねません。

「阿弥陀仏が私たちとともにまします」ことを表し示す南無阿弥陀仏の言葉がどれほど私の実人生に大きな意味をもっているのか。それはこの言葉を聞かねば知れるはずがないのです。それがなければややもすると人生そのものが何の真実性もない、ただ快適さと苦痛を往復するに終わりがかねないものになってしまいます。

そして幸いに南無阿弥陀仏にであえば、お念仏をよくよく申すこと、それが仏恩に応えていくことになりましょう。だまっていては伝わりません。我が身が称えることはおのずから人々に南無阿弥陀仏が流れていくこととなるのでしよう。かといって何も意識して人に聞かせようとする必要はないのでしよう。ただ南無阿弥陀仏を称えていくことがおのずから南無阿弥陀仏の功德力によって南無阿弥陀仏の響きが十方に伝わっていくのでありましょう。

(了)

《任職雑感》

六月十八日に大阪教区第八組門徒会で正信偈のお話をします。三十人ほどのご門徒さんが難波別院に集って下さった。

聞法にあまり親しんでおられない方が多いように思われたが、一時間の法話はあつという間に終わる。真宗の利益は、「長生不死」で「死なない自己」をいただくのであつて、この世をどう生きるのかという話を中心ではないという趣旨でお話しました。後日、聞かれたご門徒の感想は「さっぱり分かりませんでした」ということだった。以前、やはり「長生不死の利益が南無阿弥陀仏の一番の利益」とお話したところ、聞いた方からのメールでは「聞いていた周りの人たちが目を白黒させていた」とのことだった。「死なないのちを得る」というような話は、今日ではまったくの絵空事にしか受け取られないのだと思うが、分からなくても話し続けるホカはない、と自分に言い聞かせている。一方でそこをどう分かりやすく伝えられるかが自分の課題だとも思う。

* * *

《遠方法話予定》

- ①七月三十日（十時～二時半）。名古屋別院。座談有。
- ②八月四日（十時から二時半）。福井別院。座談有。
- ③九月十日（十時～二時半）。名古屋別院。座談有。
- ④十月十日（十時～二時半）。福井別院。座談有。

木村無相さんの法信 34

(昭和五十八年十一月七日のお便り。ご往生される二ヶ月前です。無相さん八十才、私は三十八才のころです)

(前号からの続きです)

そのアト、昭和三十六年(御遠忌)の十一月一日から、昭和四十八年、同朋会館の門衛中心に、真宗・聞法・読書をしたのでした。

私の五十七年から、老人ホームに来るまでの、六十九年までの十二年間で、その間に、昭和四十三年ぐらいに同朋会館で、紀さんを知ったのでした。

そして同朋会館十二年間の間に、だんだん念佛一つ

ただ念佛

ということになり、昭和四十八年二月に「念佛詩抄」を出版したのでした。

しかし、一昨年、八月の

「極重悪人唯称仏」
「ただ念佛」

はもう一つ、ウス紙一枚のスッキリしないものがあつたようでありました。

紀さんー。私は

①真実の心をもって「念佛申す」ということは落第でした。虚仮不実の心でしか、念

佛は申されぬのでした。自分で念佛申して助かろうとすることは落第でした。

②自分の心で、

本願を信じ

弥陀をタノム

ということも、落第でした。

ホントーに、信じ

ホントーに タノム

ということ

私には不可能なこと

でした。

③今回の紀さんの手紙に関係ある

「凡夫のハカライをせずして、弥陀にマルマカセする」

という。

『末灯鈔』のお言葉、

「無義の信心

無義の念仏」

自分として

ハカラワヌとか

自分の生死を

弥陀にマルマカセ

する

とかいうことも、私には不可能でした。

○

それで、クサイモノにフタをするように

念仏一つ

ただ念佛

仰せ一つ

○

といていたようであります。

悪人唯称仏

としか、体感されぬのに

極重悪人唯称仏

と体感しているかの如く「念佛詩抄」には、

三・四篇も

極重悪人唯称仏

と「念佛詩抄」にはうたっています、そ

れはやはり、不徹底なものでした。

○

それら一切。

凡夫無相の

心から

念佛申すとか、

本願を信ずるとか

弥陀をタノムとか

ハカライなく

願力にまかせ

とかの一切は、落第なものでした。

○

それが、一昨年八月の思いもかけぬ「悪

人」ならぬ「極重悪人」の大自覚(光明に

よる)によって

「極重悪人唯称仏」

「称我名字」

「ただ念佛して」

の

「よき人の仰せ」

「如来の勅命」

がはじめて、この

極重悪人の自己そのものに、

実にピッタリといただかれて、生まれては

じめて、

「わが生死の帰依所」

は、如来回向の

ただ念佛

にありと、ハッキリいただかれて、それ以

来、マル二年余、ヒトリ

念佛聞思し、

念佛聞思して来て

ただ念佛よりホカなし

とハッキリと、決定せしめられたのであり

ます。

○

『歎異抄』の第二條の

親鸞におきては

の「親鸞」とは

地獄一定の親鸞であり、

「極重悪人」の親鸞であり、

よき人、法然上人の

ただ念佛して

の「仰せ」はそのまま、「如来の勅命」

善導大師の「加減の文」そのまま

「弥陀の誓願」

そのものでした。

○

私にあっては、『歎異抄』における聖人のお言葉は、唯円の耳の底にとどまるお言葉なれど、『末灯鈔』『ご消息』と同じく、聖人チキチキのお言葉といただかれるのであります。

○

そして、

ただ念佛してミダにたすけられまいらす

べし

の「よき人」の仰せも、私にあっては、「親

鸞聖人」からの

極重悪人 無相

へのチキチキのお言葉といただかれるので

あります。

(続く)

